

藤本 幸邦 先生・講述

はろ・しのらそろえ



はきものをそろえよう

はきものをそろえようと心もそろう
心がそろうとはきものもそろう
ぬぐとくにそろえておくと
はくときに心がみだれない
だれかがみだしておいたら
だまってそろえておいてあげよう
そうすればきつと

世界中の

人の心もそろうでしょう

人生は課題

ご紹介頂きました藤本でございます。浜勝さんの元岡社長が、私のつくりました、「はきものをそろえる」という言葉に賛同して下さって、そのご縁で、九州の皆様とお目にかかることができました。まことに、不思議なご縁でございます。今日は、俣ローヤルの関係の皆さんもお集まりで、中には沖縄からまで来て下さった事をうけたまわり、感激を致しております。

こちらへ参りますと、もう桜も満開でございますが、信州はまだ梅がほころび始めた頃で、桜は堅いつばみでございます。

私は、長野市の一番南のはずれ、川中島の古戦場にほど近い、千曲川ちまがわのほとりにあります永平寺と総持寺を両本山とする、曹洞宗そうとうしゅう・円福寺という小さなお寺に、今から八十三年前に生まれました。そうして坊さんになる運命の中で、今日まで生きてきたのでございます。

この円福寺は、壇家だんかの少ない、お墓のないお寺で、そのお蔭で好きなことがで

きました。まことにいいお寺でございます。

人間にはそれぞれに、運命というものがありますが、私自身、人間に生まれようと思って生まれた訳ではないのでございます。生まれてみたら人間だった。ですから、人間としてどう生きるかは、私にとっては重大な課題なのです。

生まれてみたら日本人だったのですから、私が日本人としてどう生きるかということは、私が人間としてどう生きるかという事と、同じように重大な課題なのです。

そして、私がお寺に生まれて坊さんになった。だから、「坊さんとは何だ」ということは、私にとっては、またまた重大な課題なのです。そして、だんだんと気がついてみたら、地球の一員だったのです。そうすると、自分だけが大事で、国も地球も関係ないとは言ってはおられない。

そこで、人間であることと、坊さんであること、日本人であることと、人類であることを、団子の串のように、貫いて生きなければならぬと思うようになりました。

はきものをそろえる

今日は、「はきものをそろえる」という演題で、お話を致す訳ですが、この言葉は、本当は私のつくった言葉ではなく、「照顧脚下」という言葉が元でございます。照顧脚下とは、「あちこちよそ見をするな、足元をよく照らして歩け」という意味なのでございます。

永平寺に参りますと、この言葉が立札になって、玄関に立てかけてあります。この言葉を、永平寺をお開きになった道元禪師が、禪宗の修行のマナーにされたのでございます。

道元禪師の教えは、「行わないことは駄目だ。実行せよ。」という教えでございます。ですから、禪寺の修行は、先ず履き物を揃えることから始めるのでございます。

「自分の履き物を揃えられないような者に何ができるか。履き物を揃えることを修行にしないさい。」と、教えられたのが道元禪師でございます。

履き物を揃えようと心も揃う・心が揃うと履き物も揃う

人間が人間として修行していくのには、心の方から修行する方法と、形の方から修行する、二つの方法があります。心の方から自分で修行できる人は、よほど偉い人です。しかし、私共のような至らない者は、形の方からやっていると、心の方も整ってくるものなのです。

禅宗では、規矩という作法・儀式を大事な家風としております。食事をするのも、お風呂に入るのも、お手洗いに入るのも、全て作法・儀式があります。それをきちんとできるようにすると、自然と心も、ちゃんとしてくるのです。

そこでまず、「はきものをそろえる」ことが禅の修行のはじまりであり、「はきものをそろえる」ことが禅の修行の終りなのです。いや、終りはないのです。心が良くなったから、履き物を揃えなくてもいいんだ。悟りをひらいたから、もう何をやってもいいんだ。という訳にはいかないのです。いかに悟りをひらいても、どこまでも履き物を揃えなくてはならないのが禅の道でございます。

そこで、「照顧脚下」という言葉では、子供には分かりませんので、分かるように私が、「はきものをそろえると心もそろう」としたのです。

履き物が乱れているということは、心も乱れているということです。心が整っている人は、やる事なす事が、きれいにできるのです。そこで、「心がそろうとはきものもそろう」としたのです。

脱ぐ時に揃えておくと履く時に心が乱れない

次に、「ぬぐとときにそろえておくと、はくときに心がみだれない」ですが、この禅の教えが武士道の方へも影響を及ぼして、いざという時に、暗闇でも履いて出られるように、自分の履き物を揃えておくようになりました。

この履き物を揃えるということは、しかも向うむき（出船の方向）に揃えるということです。日本人の文化なのです。日本人の心の現われなのです。アメリカや

ヨーロッパの人は、寝る直前まで靴をはいていますので、履きものを揃えるマナーはいらないのです。ところが、日本人は畳のある部屋へ上がる。そこでどうしても履き物を脱がなくてはならない。だから、「ぬぐときにそろえておくと、はくときに心がみだれない」とこうなるのです。

永平寺へ参りますと、お手洗いのスリッパは必ず回れ右をして、向うむきに脱いであります。後から入る人のためです。人類は一代のものではありません。自分一代だけで暮し終わって、後は野となれ山となれという心では、子孫に気の毒です。

お手洗いのスリッパを、後から入る人のために回れ右をして揃えておくということは、これから来る子孫、これからの人類のために、「今日を生きなさい」という意味なのです。

自分だけ儲けて、後は野となれ山となれ、地球も汚し資源も使い果して、後はどうなったってしょうがない、では子孫が可哀相ですよ。子や孫の事を思ったら回れ右をして、後から来る人のために揃えておいてやらねばならない。

そうすれば、後から来る子や孫たちが、「ご先祖様ありがとうございます」と言いますよ。

誰かが乱しておいたら黙って揃えておいてあげよう

先進七カ国だけのサミットではだめです。遅れている途上国のために、履き物を揃えてやらなければ世界は平和になりません。そこで、「だれかがみだしておいたら、だまってそろえておいてあげよう」とこうなるのです。

もう、日本の国だけが栄えればよいという一国繁栄主義、一国平和主義は通りません。宮沢賢治先生が、「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない。」と言われました。自分だけの幸福などというものは、この世にはないのです。

日本は内乱もなく栄えていますね。これは、みんなが仲が良いからです。すなわち日本の特質は縦社会なのです。産業体系が、大企業があり中小企業があり、

そのまた下請けがあつて出来上つている、構造なのであります。これが日本の安定した力です。

アメリカには、下請けというものはありません。ところが日本の国は、親会社子会社というようになっていて、しまいには、家庭の仕事の中にまでつながっているのです。親会社は子会社を助け、子会社は親会社を助け、皆で仲良くやつていこうという心があつたから、日本は発展したのです。

経済が豊かになつたという事は、それだけ背後に努力と思ひやりの心があつたからです。ところが、ただ一つ残念なことに、この素晴らしい生産力を何に使うかという事を、日本人は知らなかつたのです。それは、長い間貧しく生きてきたから、お金の遣い道を知らなかつたのでございます。

政治感覚というものは、政治家がやる仕事ではなく、国民がやる仕事なのです。日本の国民が、先ず履き物を揃へ、日本の行くべき道をはつきりと見定めて、世界の履き物を揃へると、政治の方針も揃うのです。これが、「だれかがみだしておいたら、だまってそろえておいてあげよう」という事なのです。

そうすればきつと世界中の人の心も揃うでしょう

私の履き物を揃えるという哲学は、実際に行なうことによって、日本人の心が一つになり、日本の素晴らしい生産力が世界のためになる事を願っているのです。どんなに大きな願いも、先ず自分から始めなければなりません。自分から、そして自分の足元から始めなければなりません。まず、皆さんのご家庭から始めなければなりません。家庭が乱れているようではだめです。

中国には、儒教の教えのなかに、「修身齊家治國平天下」という言葉があります。まず、自分の身を修行しなければなりません。その次が、自分の家庭を仲良く整えなければなりません。その次には、自分の国が治まらなければなりません。それらができて、はじめて世界は平和になるのだ。というのが、この修身齊家治國平天下の道理なのです。

また、「ものに本末あり、ことに終始あり」という言葉もあります。ものには本と末があり、ことには終りと始めがある。そこで先ず、自分が身を修めてはじ

めて家が整う、家が整ってはじめて国も整う。そして、世界は平和になる、この順序を踏まないで、「平和・平和・戦争反対！」と叫んだってだめですよ。実行しなければだめなのです。

そういう中で人間が人間である基は、思いやりの心を持っていることです。人間の特質です。親は元より子を思いやります。ところが、人間の子供だけが、親を思いやるのですね。他の動物は、親を思いやりません。育てられっぱなしです。最近、老人も長生きになりました。だんだんと、病院も老人ホームも一杯になりました。この頃では家庭看護ということで、長い病氣の人は、病院から家庭へ帰されるのです。

私の村での話ですが、「弱ったなあ。婆ちゃん帰って来るそうだが、どの部屋に寝かせようかなあ。子供は受験勉強があるし、弱ったなあ。」

そしたら、「父ちゃん、庭先にブレハブ建てたらどう？」

「あ、それはいい事を考えた。」

という事で、ブレハブ住宅を病室にしましたが、その年は夏が余りにも暑かった

せいか、お婆ちゃんはお亡くなりになりました。そこで、

「婆ちゃんが亡くなったから、プレハブ片付けようかなあ。」

「そうですね。もう庭先にあつてもじやますから。」と話していたら、子供達が、
「父ちゃん母ちゃん、壊しちやいけないよ。」

と言うから、「どうして？」って聞くと

「今度は、父ちゃんと母ちゃんが入る番だ。」と言ったそうです。こうなつちやうと、もうおしまいですよ。

夫婦だって、友達だって、思いやりの心が大事です。商売だって同じです。

来る人もまた来る人も福の神

私が顧問コンシェルジュをしております長野のファーストホテルは、若いお嬢せうじょうさんが一所懸命にやっておりますが、何かモットーを作ってくれと言うから、

「来る人には楽しみを、帰る人には喜びを」と書いてやりました。そうすると、それをそのまま箸の袋に書きちゃいまして、大変繁昌しております。

商売というものは、自分が儲けるためにやっているんだと、皆さんは思っておられますが、それは違うのです。商売とは相手を儲けさせるため、相手を喜ばせるためにやるのです。それが商売の精神なのです。

ですから、儲けよう儲けようと思うと失敗しちゃうんです。世のために尽そう皆を喜ばせよう、お得意様を大事にしようと思うと繁昌するんですね。来る人もまた来る人も福の神なんです。身形や風体ではないのです。

福の神がいらっしゃった時には、「いらっしゃい！」
帰るときには、「毎度ありがとうございます。福の神様またどうぞー！」
と言わなくちゃいけない。

そこで大事なことは、商売というものの裏にも精神があるという事です。その精神が形となって表れる。その会社の社風にもなるのです。

履き物を揃えると発展する

私の「はきものをそろえる」の詩が、初めはお寺に広がっていましたが、そのうち学校にも広がるようになりました。たまたま学校でもらったこの詩を、いい言葉だからといって、プリントにしてお客様に配る会社も出てきました。

そのプリントを、岐阜の各務原（各務原はもと各務郡に属する）の梅村さんという社長が見て、私の所へ飛んできたのが縁で、たまたまナームの会の依頼で、有楽町の読売ホールで講演をした時に、梅村社長が二千枚ほど、「はきものをそろえる」のプリントを刷って皆さんに配りました。その中のお一人に、榊ローヤルの鍵山さんの奥さんがいらっしやったのでございます。

そのプリントを見た鍵山社長さんが、「我が社の社是（しやせ）はこれだ！」と決められてしまったのです。これさえできればいいんだという事で、とうとう私に、額（かぶ）に書いてくれと言われるので、「はきものをそろえると心もそろう」と、書いてあげました。その額を社長室に掲（かか）げて、全社員に、

「何も難しいことは言いません。どうか履き物を揃えて下さい。」

と、言われたのです。そうしたところが、鎌山社長のところは、益々発展しちやつたんですね。ですから皆さんも、履き物を揃えられると必ず発展します。ちゃんと証拠があるのですから・・・。

そこで元岡さんも、自分のところのトンカツ屋も発展しようと思って、履き物を揃えるようになったのです。自分だけ揃えるんじゃないんです。私が、

「元岡さんも、はきものをそろえるのポスターの下に、株式会社・浜勝と印刷して、どこへでも配って下さい。」

と、言ったら、ポスターじゃ大きすぎるからと、名刺にしてくれたんです。

これは、

「日本中で履き物を揃えようじゃありませんか。そうして、世界中の人の心も揃うように生きて行こうじゃありませんか。」

という、私の願いを分かってくれたのです。

眞の民主主義

私が今日参りましたのも、マナーを失った日本人が、みんなで履き物を揃え、他人の履き物も揃え、世界の履き物も揃える国民になって頂きたい、という願いに参ったような訳であります。

日本が戦争に負けて、今までの価値感が、アメリカ流の価値観へと変わったのでございます。しかしこの民主主義は、個人の権利に基づく近代社会の原則ですから、これは学ばなければなりません。

しかしながら、自由と言ったって何が自由なのか、平等と言ったって何が平等なのか、権利と言ったって何が権利なのか……。『権利があるから生きているんだ。』と言ったって、人間は一人では生きちゃいられません。そこには社会があります。自由・自由と言っても、自分勝手じゃ生きてはいられません。平等・平等と言っても、上も下もないという事が平等ではありません。ところが、今まで余りにも押えつけられてきた日本人は、この権利と自由・平等を、自分のわがま

ま勝手と受けとめてしまったのです。

自由というのは、人に言われなくても、自分が自分の道を進むことをいうのです。平等という事は、人間として平等なのであって、社会の秩序には上下があります。一番平等なことは、人間は必ず死ぬという事です。どんなに偉い人でも、お金持ちでも、必ず死にますよ。これほど平等なことはないのです。お互いに死ぬ身ですから、仲良くしようというのが平等なのです。

もし、権利と言うものがあるならば、親には子を育てる権利があります。兄弟姉妹は、仲良くする権利があります。子は親を思う権利があります。友達には、助け合う権利があります。それが人間の権利です。人間が人間たる権利は、人を愛する権利、人を思いやる権利なのです。

もし私に、人を思いやっちゃいけないと言ったら、私は怒りますよ。人の履き物なんか揃える必要はない、と言ったら私は怒りますよ。何故ならば、それは単なる個人の権利ではなく、人間の権利であるからです。

上野駅のできごと

日本が戦争に負けて、昭和二十一年の春に復員し、古里ふるさとの山河まがたけに見えましたが、弟がラバウルで戦死したという報が入り私は母一人子一人となりました。もうこゝなつては、自分だけが座禪ざぜんの修行をしている時ではない。日本の国民と共に、この敗戦祖国を建て直そうと、本山にお願いを入れて運まきながら家庭を持ちました。もう三十八才でした。

昭和二十二年、本山においとまごいに行つた帰り道、私は上野駅で汽車を待つておりました。汽車に乘ろうとする人の長い行列が、改札口から上野駅の外まで続いておりました。やがてお昼近くになると、行列のあちこちで、汽車を待つ人達がお弁当を食べ始めました。すると驚いたことに、ゾロゾロと裸足はだしで裸の子供達はだかがあらわれて、お弁当を食べている人達の所へ行つて、

「おじさんおくれ。おばさんちようだい。」と言って、もらい歩くのでした。

もうじき冬が来るというのに、大勢の裸足で裸の子供たちが、お弁当をもらい

歩く姿に、私はすっかり心を痛めてしまったのです。

一人の子供が、お弁当を食べているおじさんの肩越しに

「おじさん、おくれよ。」と手を出しました。おじさんは、

「きたねえー」

と言つて、その手を払いのけました。するとその子はいきなり、おじさんのお弁当に、「パツ」とつばきをかけたのです。

「なにをするんだ！」とおじさんが怒った時には、その子は人ごみの中に逃げていました。もしあのおじさんが、少しでもあの子に食べ物に分けてやっていたら、あの子は、つばきをかけなかったでしょう。

ふと見ると、もう食べ物もらい歩いてお腹がいっぱいになったのか、三人の子供が日向ぼっこをしていました。

「おいで、ちょっとおいで。」と声をかけると、

「何だい」と一人の子が寄って来ました。

カバンからリングを一つ出してやると、

カバンからリングを一つ出してやると、

「おおい、もらったぞおっ！」と他の二人の子供に見せると、その子たちもやって来ました。

すると、最初にもらった子がひとかじり食べると、次の子に渡します。その子がまたひとかじりすると次の子に渡して、一つのリングを三人でかじり合つて、
芯^{しん}まで食べました。

「ああ、私が求めていた、皆で助け合つていこうという心は、この子供たちが持っていたのか。」と思うと、急に子供たちが可愛くなって、もう一つ持っていたリングをやりました。とうとう仲良しになって、

「どうだい、おじさんの家に来ないかい？」という相談になりました。そして、三人の子供を連れ帰ったのでございます。

母や家内が驚いて「だめだ。だめだ。」と言いましたが、説得をして、三人だけという約束で子供たちとの生活が始まりました。それからの話は、先程紹介して下さいました、愛育園物語「おっしちゃん」という本の中に書いてございます。

思いやりの心と責任

三人が十人になりました。十人が二十人になりました。二十人が三十人になりました。お寺はもう、子供たちでこった返しです。本堂は相撲とり場になりました。家内が山のような洗濯をしています。まだ洗濯機のない頃です。朝早く起きて、薪で飯を炊かなければなりません。しかも、食べる物も着る物もない頃です。でも私たち夫婦はまだ若く、使命感に燃えて頑張りました。

三十名が四十名になりました。四十名が五十名になりました。そして、この四十五年の間に、四百名少しの子供を育てることができました。

そして今、私の寺には四十五名の子供がいます。赤ちゃんから高校生、そして勤め人までいます。彼らは戦争孤児ではありません。繁栄の中から出てくる孤児たちでございます。それは、家庭崩壊・登校拒否・非行・情緒不安定という、かわいそうな子供たちなのです。

最近はその開放ということを言いますが、これはいけません。責任のない事は

困ります。去年も三才の女の子と、一才半の赤ん坊が来しました。両親は共に十九才です。十七才で同棲して、二人子供を生んでお別れです。私の所に預け、それっきり来ません。

姉ちゃんの方は、母親が置いていったアンゴラの襟巻を、夏でも抱いてはなさない。弟は、「姉ちゃん、姉ちゃん」としがみついて離れない。その姉ちゃんは、石を拾うとポケットに入れておいて、その石をどこへでも投げるのです。

親たちはまだ十九才です。これから先の長い人生には、また他の男と巡り合い、他の女と巡り合っていくでしょうが、私の所へ置きっぱなしにしていた子供たちは、どこへ石を投げたらよいのでしょうか。悲しい繁栄です。悲しい自由です。今年姉ちゃんは、幼稚園へ入りました。私達はただ繁栄・繁栄・自由・自由とそれが幸福のように思っていますが、人間には思いやりの心と、もう一つ責任というものがなければいけないのです。

責任のない愛はだめです。今日は若い方もいらっしゃいますが、どうか、簡単な結婚はやらないでもらいたい。最近では、「成田空港でさようなら」が流行って

いるそうですが・・・。

「盛大な披露宴ひろうさんやって、神様の前で二人で誓ちかったじゃないですか。」
と私が言ったら、

「いやあ、あれは儀式で・・・。」

とこうなのです。そういう人には、神も仏もないのです。

金魚の葬式

まだお寺で子供を育てている頃でした。ヒデ子ちゃんという、知恵遅れの子が来しました。小学校三年生なのに、五つの数もかぞえられず、自分の名前も書けないのです。一年生からやり直してもだめでした。でも仕事はよくやってくれました。

子供が増えて、下水設備が整わなかったのか、その頃は夜になると流しにナメ

クジが出てくるようになりました。ナメクジというのは、夜の九時ごろに出てきて、舐めて歩くからナメクジと言うんだそうです。私が、

「ヒデ子ちゃん、またナメクジが出ちゃった。お塩をかけて殺しちゃうっておくれ。流しちゃうんだよきれいに。」

とヒデ子にお願いすると、シャーシャーとやっておりました。

ヒデ子ちゃんの寝た後に行ってみると、もうナメクジは一匹もいませんでした。よくしたもんだと思っていたら、あくる朝女の子の部屋が大騒ぎです。何が起きたのかと思っていると、一人の女の子が飛んできて、

「おっしやん大変よ。昨夜ヒデ子ちゃんが、かんづめの空缶の中にナメクジをいっぱい飼ったの。それが夜中に這い出してきて、あっちこっちナメクジだらけ。足で踏んづけちゃったの。」

「だめじゃないかヒデ子ちゃん。お塩をかけてきれいに流せと言ったのに、どうしてナメクジなんか飼ったの。」

と私がとがめますと

「だって、殺せばかわいそうなもの。生きてるもん。飼ってあげばだんだん大きくなるよ。」

子供たちはどっと笑いしました。その時、みんなが笑いこぼしている中から、むせぶような悲しい泣き声が聞こえてきました。ヒデ子が部屋の隅にうずくまって泣いているのでした。その泣き声が私の心を打ちました。

「みんな笑うのやめなさい！笑っちゃいけない！」

私の大きな声に、みんなも笑うのをやめました。私は泣きむせているヒデ子の肩を抱いて、

「ヒデ子ちゃん、ごめん。笑って悪かったね。そうだよ、ナメクジだって生きてるもんなんだ。殺したらかわいそうだよ。でもなあ、ナメクジは遠い出しちゃうからだめなんだよ。金魚をやるから、かんべんしておくれ。」

と、私が金魚鉢から小さい金魚を一匹、ヒデ子のかんづめの空缶に入れてやると、まだ目に涙がたまっていました。にっこり笑って、

「おっちゃん、ありがとう。」

と言ってくれました。

二、三日して、金魚が死んでしまったと言うので、空缶を持ってこさせると、金魚はパンくずにくるまれて死んでおりました。おまけに牛乳までくれてやっておりました。

「ヒデ子ちゃん、こりや、餌をやりすぎちゃったよ。」

と、私は飼い方を教えてやらなかったことを後悔しました。ヒデ子は、金魚をかわいがりすぎてしまったのです。

ヒデ子は千曲川の河原から石を拾ってくると、庭の隅に金魚のお墓をつくりました。お線香とお花を持って、私に来てくれと言いますから一緒にいくと、お花とお線香を金魚のお墓にあげて拝んだ後、

「おっしちゃん、お経読んで。」

と言いました。私はヒデ子と二人で、金魚のお葬式をしたのでした。

円福寺の観音さま

「ヒデ子ちゃんきたない。ヒデ子ちゃんきたない！」

と子供たちがみんなで言います。ヒデ子が寝小便の布団に平気で寝ているということです。女の子たちの部屋に行ってみると、ヒデ子は本当にぬれた布団に寝ていました。

「ヒデ子ちゃん、おねしょしたのかい？」

と私が問うと、ヒデ子は首を横に振って、

「私、乾かしてやっているの。」

と申します。それはカヨちゃんの布団でした。カヨちゃんがおねしょして、冷たくて嫌だなと言ったら、

「私の体は温かいから、寝ていれば自然に乾くよ。」

と言って、ヒデ子はカヨちゃんの寝小便の布団に寝ていたのでした。私は、

「ヒデ子ちゃんは、ちっともきたなくないぞ。ヒデ子ちゃんは円福寺で一番きれ

いな子だ。みんなは、友達の寝小便の布団に寝てやることができるか？。でも風邪をひくといけないから、炬燵で乾かそう。

と、ヒデ子を抱き起こしました。その時私は、この知恵遅れの子が教えた訳でもないのに、教わった訳でもないのに、どうしてこんな優しい心を持っているのかと思うと、何だかヒデ子が観音さまのように思え、いじらしくなり、すっかりヒデ子を抱きしめていました。不思議そうに私を見上げた、ヒデ子のまあいいお目々を今も忘れません。

赤いほおずき

一年生からやり直したヒデ子は、小学校を卒業する頃には、二年生か三年生ぐらいの知能になりました。けれども中学校へ行くようになってから、てんかんを起こすようになりました。先天性のてんかんで、薬を続けていると発作が遠のく

程度で、根本的には治りませんでした。ヒデ子の発作はいつも朝でした。

そのような訳で、中学を卒業しても就職もできませんので、十八才まで円福寺のお手伝いをしてもらっていました。しかし母親が、一人暮らしで寂しいので帰してほしいと申しますので、母親の元へ帰しました。

家に帰ってから、農家の手伝いなどをしていましたが、円福寺に来るのが楽しみで、ときおり遊びに来ておりました。

ヒデ子を母親の元へ帰してから、二年あまり経った夏の朝のことです。母親から、ヒデ子が大やけどをして入院したから来てほしいと電話があり、急いでかけつけてみると、ヒデ子は全身包帯にくるまれたまま、もう、こと切れていました。母親が外で仕事をしている間、ヒデ子は囲炉裏で味噌汁を煮ていたようですが、てんかんの発作がおき、囲炉裏にころげ落ちていたそうです。円福寺にいれば、こんな事にならなかつたらうにと悔やまれました。短い二十年の一生でした。

秋がきて、ヒデ子の四十九日の法事を円福寺でやることになりました。その時ヒデ子の母親が、赤いほおずきをたくさん持ってきました。ヒデ子が、ほおずき

が赤くなったら、円福寺の子供たちに持って行ってやるんだと言って、庭にたくさん植えておいたのだそうです。

そのはおずきを、仏様の前に供えて、円福寺の子供たちとお経をあげて、ヒデ子の冥福を祈りました。

「おっしやん、早く死んでしまつてすみません。思返もしないで。でも円福寺に居た時が一番幸福でした。赤いはおずきを、子供たちにやっつてちょうだい。」と、ヒデ子が言っているようでした。ヒデ子は、赤いはおずきになつてしまったのです。ヒデ子の心は、真赤なはおずきになつたのです。

そして、勲章なんかもらつて、「おっしやんは偉いですなあ」なんてほめられているこの愚かな和尚に、本当の人間の心、本当の仏様の心を、ヒデ子は教えてくれたのです。

二十一世紀の心

一発の爆弾で、広島・長崎の赤ちゃんから大人まで、十数万の人々を殺した人
がお利口なのでしょうか？。

それとも、ナメクジ殺せばかわいそうだと、飼っておいたヒデ子ちゃんがおバカ
なのでしょうか？。

自分の国さえ儲かればいいと言っている、日本の国民がお利口なのでしょうか？。
人のお寝しよの布団を、自分の体温で乾かすと言って、寝ていたヒデ子ちゃんがお
バカなのでしょうか？。

いま歴史は、このことを人類に問うているのです。来るべき二十一世紀は、ヒ
デ子のこの心を待っているのです。

一食一円

禪の修行寺では、ご飯を食べる前に、ご飯つぶを七粒とっておきまして、後で小鳥に施すという生飯の儀式があります。感謝の儀式であります。それを私は、御飯を一回食べたなら、アジアの子供のために一円下さい（一食一円）、というお願いにしました。それがSABA運動です。

このSABAを世界救世銀行として、一食一円の支援を頂いて、世界を救おうという運動を始めました。お蔭様で、現在一万人の人が集まりました。

このお金を百万円東南アジアへ持っていくと、二千万円の価値になるのです。今は円高です。二千五百万円、いや三千万円になるのです。バン格拉デシュやネパールへ持っていけば百倍になります。

私は今、アジアの子供を学校へやるために努力をしています。バンコクのスラムの子供に、月に千円送ってやると、その子は小学校に通えるのです。今、五十人の子供に送金しています。

今年から八十人の子供を、学校に通わせようと思っています。八十人といっても、八万円送ってあげればよいのです。今私が、毎年五十万円送っているお金で、タイのバンサワイ村の二百二十人の子供が、中学校へ通っています。

インドネシアにも育英事業をつくりました。毎月五千円ずつ送っているフォスタープランは、学校を建てるためです。フォスタープランでは、現在二十四人の子供たちに送金しております。これが一食一円の力です。

みなさん！金丸信さんの七十億円、湾岸戦争に出した何百億ドル、バブルで消えた何兆円、これらのお金と私の一食一円とどっちが価値がありますか？。人を殺したり、自分だけ儲ければよいというお金では、世界は救えません。世界は世界人類を愛する者によってのみ救われるのです。争いやいじめでは世界を救うことはできません。

まだアメリカは、平和のための戦争だと言っておりますが、今までのように武力による平和は、もはや保てません。これからは、みんなで愛し合い、助け合い、そして喜び合い、みんなで祝福し合って生きていかなければならないのです。

最小限度の必要・最大限度の奉仕

アメリカの今のやり方は全部行き詰まります。アメリカが、世界のリーダーたる時代は終るのです。世界のリーダーは、世界最初の戦争放棄国の日本がならなければならぬのです。そのために、いま発展しているのです。

人殺しの道具を、巨額のお金を遣って造っている国が栄えるはずがありません。日本は戦争をやめたんです。世界中が豊かになるためには、人類が戦争をやめればよいのです。それには先ず、日本が人類を愛し、世界を愛する国にならなければなりません。それが日本の使命なのです。

現在世界中で、世界のために尽くせる本当の力を持っているのは、日本しかないのです。こんな素晴らしい国民が、そのことを知らないのです。政府も知らないのです。そこで、この名もない円福寺の坊主が、立ち上がらなければならないと思って、おっ始めたのです。

今日、元岡社長さんが、

「いつでも、お一人でお出かけになるのですか？」

と聞きました。本山に居る時はお供がついていますが、私の願いは、「最小限度の必要に生活して、最大限度を人のために尽くしたい。」ことなのです。

お供を一人連れて来る費用があったら、アジアの子供を一人、助けられるじゃありませんか。

必要な物で世界経済を回そう

私は、日本国民に貧乏になれとは言いません。貧乏は悪です。豊かであることは善です。しかし、日本国民は物を無駄にしている。捨てる経済は悪です。だから、この捨てる経済をできるだけやめて、必要なものをより安く沢山生産して、必要なもので世界経済を回わそうじゃありませんか。

一食一円運動が始まって、地元の篠ノ井ライオンズクラブが、三百万円出して

くれて、カンボジアに一つ学校が建てられる事になりました。それを聞いた日本テレコムの労働組合員三千人が、一食一円運動をやってくれて、一人が一年間で千円になると言って三百万円くれました。そして円福友の会も三百万円出して、今年にはカンボジアに、小学校を三つ建てることになりました。

P K Oもいいでしょう。でも国際連合の命令で、ボル・ポト派の中へ選挙を勧めに行つて殺される。可哀相じゃないですか。選挙と言つても、学校にも行つていない、字も書けない国民が多くいるのです。こう言つては憚りますが、今のアメリカの方式ではだめですよ。愛してやらなければだめなんです。

人がやらなくても 私はやらなければならない

私は幾度もアジアの国々を、ボランティアのため歩きました。先日も帰国するときに、バンコクのドンムアン空港へ参りますと、なんとそこには、私が毎月、

お金を送っている、ブラディープ財団のスラムの子供たちが、私を見送りに来ているではありませんか。裸足の子もいます。親のサンダルを引っかけているような子もいます。

「おつ、みんな送りに来てくれたの。こんな所にまで来なくてもいいのに。またお金を送るからね。親孝行してよく働いて勉強するんだよ。できてもできなくてもいいから、通知表だけ送っておくれ。来年また来るから、もっと大きくなって、いい子になっていておくれ。」

と、私が言いますと、引率ひんそつの先生が通訳してくれました。すると子供達は、全員空港のフロアに座りました。そして額ひたいをフロアにつけると、仏様を拝むようにみんなで私を拝むではありませんか。刺身を食べ、カツ丼かつどんまで食べている生奥坊主なまおくぼうずです。でも子供たちは、拝んでくれるじゃありませんか。

あの上野駅で、裸足で裸の子供たちを助けようと思った時と同じ衝動しやうどうが、私の心の中に起きました。

「やらねばならない！。私はやらねばならない。人がやらなくても、私はやらな

ければならない！」

と、改めて心に誓ったのでした。

世界一家達成運動

世界中に思いやりの心を。みんなで世界のために尽くそう。それが必ず、世界一家の運動となることを信じています。

どうぞ皆さん！この至らない和尚ですが、もう八十三才です。人生マラソンのゲートは見えています。ですから、今スパートしているのです。最後の最後まで走って、あの世へ行くテープを切るまで私は走り続けます。

日本国民の皆さんに、この私の願いを叶えて頂きたいのです。それが今日参りました、私の切なる思いでございます。

ご清聴せいしやうありがとうございます。

(三六)

「はきものをそろえる」を出版するにあたって

株式会社 浜 勝

社長 元 岡 健 二

平成四年一月、ある方より、「心の中のふるさと」という小冊子を頂きました。この小冊子には、親子の絆と故郷への想いが、走馬灯のように描かれていたのです。私自身の生い立ちと、八十才の老いた身で、故郷の広島で一人暮らしをしている母への想いが、洪水のように押し寄せてきました。

二年前に亡くなった父の事、何も親孝行できないまま、長崎に来ての二十一年間の想いが、作者の思いと重なり、涙があふれてあふれて、誰にも見られていない事を幸いに、泣けるだけ泣いてしまったのです。

どなたが「心の中のふるさと」を小冊子にされたのだろうかと、祈るような想いで、その方への糸をたぐって行きました。その糸に、ヒューマンネットワーク

福岡とのご縁がありました。株式会社ローヤル様、そして、福岡営業所・所長の塩屋一角様の存在を知り得たのは、その交流会の場でした。

その席で、主宰者の上原秀樹先生とのご縁を頂き、先生から、「縁尋機妙」という素晴らしい著書を頂きました。この本は、「野に咲く本物の人々を訪ねて」という主旨で、素晴らしい方々にふれてありました。その中に、「誠意の経営をひたすら続ける・鍵山秀三郎社長」とあり、「心の中のふるさと」を小冊子にされた方に祈りが届き、「縁尋機妙」の本での出会いがありました。まさに、縁尋機妙そのものでした。

それから、塩屋所長についてまわる日々を重ね、福岡営業所にお誘いを受ける機会に恵まれたのでした。ご訪問して、朝の掃除に感動し、物を大切にされる社風に感動し、言葉では言い表せない体験をさせて頂きました。

帰り際に気にとめていた、「はきものをそろえる」のポスターを、譲ってほしいと恐るおそる口に出すと、快い返事と共に、塩屋様の温かい笑顔が私の心の奥深くに広がっていきました。

そんなご縁で鍵山秀三郎様が、長崎の私共の店と本社にお立寄りになり、その時、「はきものをそろえる」の詩を作られた、藤本幸邦先生（ミキハツキ）の存在を知ったのでした。更に、藤本先生の著書「おっしょん」を塩屋様より頂き、鍵山秀三郎様のご助言もあり、長野に藤本幸邦先生をお訪ねさせて頂きました。

藤本先生も大層喜んで下さり、二時間あまり一気に話をして下さったのでした。そのお話を、私だけが聞いたのでは勿体ないと思い、その想いをお伝えしたところ、即座に、「長崎へ行ってあげましょう」と言って下さったのです。こうして、創業三十周年の講演会を、四月十四日に福岡で、翌十五日に長崎で、五百名を超える方々をお招きして開催する事ができました。特に、ヒデ子ちゃんのところのお話は、多くの方々から、「素晴らしいかった」のお言葉をいただきました。

この度、ご縁の糸を下さった上原秀樹先生にお願ひして、筆録・編集をして頂きました。私をご縁をいただいたように、この小冊子が読者の方に一時でも、やすらかな平和の大切さを想っていたくための、お役に立てれば幸いです。ごさいます。

「縁尋機妙」を、かみしめながら・・・。

藤本幸邦先生 略歴

- 明治43年 長野市篠ノ井・円福寺に生まれる。
- 昭和10年 駒澤大学仏教学科卒業。
- 昭和20年 曹洞宗大本山総持寺に修行中応召。
- 昭和21年 復員。戦災孤児救済運動を推進。
- 昭和23年 養護施設・円福寺愛育園を設立し園長となる。
- 昭和56年 勲五等瑞宝章受章。
- 昭和59年 仏教伝道文化賞受賞。
- 平成4年 外務大臣表彰受章。

現在 ●養護施設円福寺愛育園・円福幼稚園・円福保育園理事長を兼ね、
世界法民太陽学園学園長として、世界一家を唱導。
●円福友の会を主宰。アジア難民救援、途上国学童支援のSABA
運動を展開中。
●著書に愛育園物語「おっちゃん」、おっちゃんが証明した実行の
哲学・おっちゃんの般若心経(近刊予定)がある。

住所 〒388 長野市篠ノ井横田869番地 円福寺

電話 0262-92-0381

創業二十周年記念通函録
はきものをそろえる

◆発行所

〒859-04

長崎県西彼杵郡多良見町市布名一五五八

電話 ○九五七―四三一―一八六三

FAX ○九五七―四三一―二五九二

株式会社 浜 勝

◆筆録・編集

上 原 秀 樹

〒816 福岡市南区井尻二―四九―三九
電話 ○九二―五七二―一三八〇

◆印刷

株式会社 ミドリ印刷

〒816 福岡市博多区西月隈一―二二―四
電話 ○九二―四四一―六七四七

◆価値

三〇〇円

